

第6回日佛コロック「佛教の 地方文化への適應」報告

田 中 文 雄

1 コロックにおける東洋學研究の足跡

日佛コロックと通稱されるこの學術會議は、三年ごとに日本とフランスで交互に開催される學術シンポジウムである。日佛會館とフランス國立科學研究センター（以下 CNRS と略す）との協定によりおこなわれ、それぞれの専門分野が、日・佛の二國間の學術交流を目的とした研究集會を開く多領域研究集會である。具體的には、日本側では日佛會館を窓口にして、傘下の關連諸學會（現在は24學會）が母體となり、フランス側の對應する研究機關との間に相互に責任者をたてて行く。會議の形態などは、開催者側の自由な裁量にまかされ、テーマや方法も一定の決まりがあるわけではない。

第1回のコロックが1976年に日本で開催されて以後、第2回は1979年にフランスで、第3回は1982年に日本でおこなわれた。以上第3回までは、日佛東洋學會が事實上の休止状態にあったので、正式に参加はしていない。ただ、2回にわたり秋山光和教授が「日本學部門」を組織され参加されたが、中國學關係は不参加であった。日佛東洋學會は、1955年創立され、初代會長は石田幹之助教授であったが、教授の没後は活動が停滯し、學會としてコロックに参加できる状態にはななかったのである。ところが、1983年に第31回アジア・アフリカ人文科學者會議（CISHAAN）が東京で開催されるのを機に、當時の日佛會館フランス學長であったレオン・ヴァンデルメルシュ Léon Vandermeerch 教授が、福井文雅教授に復興工作を依頼した。福井教授は従來の書類等を調べ、整理して、新たに榎一雄教授を會長として、同年7月に再發足した。これにより、

日佛東洋學會はフランスの東洋學界との“窓口”の役目を果たし、再發足2年後の1985年には東洋學をコロックの一部門にたてることができるようになった。

日佛東洋學會が参加した第4回と第5回のコロックについては、すでに報告されているので、以下に概略を記す。詳しくは、[]内の文獻を参照されたい。

第4回(1985年10月7日～11日 フランス) テーマ; 道教と日本文化

[福井文雅『中國思想研究と現代』(隆文館 1991 9/17), 同氏「日佛研究集會「道教と日本文化」」(『東方宗教』第67號 1986 6/13), 『日佛東洋學通信』第5號]

第5回 東洋學第一部會(1988年10月4日～7日 日本・伊東) テーマ; 日本

・中國の宗教文化の交流(會議録: 酒井忠夫・福井文雅・山田利明編『日本・中國の宗教文化の研究』平河出版社 1991 9/25)

東洋學第二部會(1988年10月4日～8日 日本・京都) テーマ; 中央

アジア諸言語寫本(會議録: *Document et archives provenant de l'Asie Centrale: Actes du Colloque Franco-Japonais de Kyoto* (4-8 octobre '88), Dôhōsha (Kyoto), 1990)

[『日佛東洋學通信』第10號, 福井文雅「第五回日佛コロック」(『東方宗教』第74號 1989 11/18) 酒井忠夫・福井文雅・山田利明編『日本・中國の宗教文化の研究』平河出版社 1991 9/25]

先に述べたように、會議の形式や運営方法は、開催者の裁量にまかされているので、第5回コロックでは東洋學關係の會議は、二部會に分かれて開催された。今回のコロックは、前回の會議をより發展させ、兩國の東洋學の學術交流を更に深める意味をも含めて開催された。

2 第6回コロックの概略

第6回コロックは、1991年9月23日から27日まで、パリにあるコレージュ・ド・フランス Collège de France とその関連研究機關で催された。テーマは、「佛教の地方(地域)文化への適應」 *L'adaptation du bouddhisme aux cultures locales* で、主會議と分科會の二つの會議が行われた。主會議は、上

第6 同日佛コロック「佛教の地方文化への適應」報告（田中）

述テーマのもと廣い視野に立った概括的研究，あるいは他分野の専門家の關心を引き得る不變的，ないしは理論的側面に關する研究をフランス側は要請してきた。一方分科會は，同一のテーマを扱いながら研究の中心を中國研究に絞り，中國地域と中國宗教の中での佛教の適應を討議した。日本側では，この分科會を中國部會と稱したが，フランス側は Atelier d'études Taoïstes の名稱を用いていた。實質的にも，兩國の研究者ともこの部會での發表は，道教との係わりから佛教を論じるものや，道・佛二教の比較研究が，發表のほとんどを占めていた。

しかし，會議が二つに分かれたからといって，それらは相互に關係しながら行われたし，參加者（オブザーバーも含めて）は双方の會議に出席し，討議に加わった。會議場も歩いて5分程度の近さであったので，參加者登録の時間と中國部會の會議時間が，一部重なったことを除けば，時間的にも双方に参加することは充分に可能であった。

この會議の運営組織と擔當者は，以下のとうりであった。

フランス側組織委員會（Comité d'organisation en France）責任者：ルイ・バザン Louis Bazin，ジェラルド・フスマン Gérard Fussman，クリストファ・シペール Kristofer Schipper，アンヌ＝マリ・ブロンドー Anne=Marie Blondeau，今枝由郎

日本側組織委員會責任者：秋山光和，福井文雅，中谷英明，山田利明

フランス側は組織委員會責任者の名稱を使っているが，日本側は秋山教授を代表者，福井教授を責任者，中谷・山田氏を事務擔當（書記）として責任分擔を行った。

實際のコロックは，以下にあげるプログラムのよう進行した。ただし，プログラムでは充分でない箇所は，報告者が加筆した。（また，中國部會では使用言語が數ヶ國語にわたっていたので，〈 〉内に示した。）

① 中國部會（Atelier d'études Taoïstes）

9/23月 コレージュ・ド・フランス中國學研究所 Institut des Hautes
Chinoises du Collège de France 會議室

開會の辭

9:30 シペール 開催の経緯—第4回以降の説明—〈英語〉

9:40 福井 日本側の状況・謝辭〈佛語〉

研究發表

9:45 山田利明 道士の懺悔；齋戒における道・佛二教の關係〈英語〉

10:15 フランシスクス・ヴェルエレン Franciscus Verellen
中世道教の靈驗；『道教靈驗記』について〈英語〉

10:45 前田繁樹 吉田文庫本『脩眞九轉丹道図』について〈英語〉
〔以上、司會は福井、シペール〕

休憩

11:30 カロリス・ジス=ヴェルマンド Caroline Gyss=Vermande
水陸齋畫における使者と密使—スライド付き—
〈英語〉

12:05 三浦國雄 止觀と坐忘と居敬；三教の身心技法〈中國語〉

晝食

14:05 坂出祥伸 孫思邈と佛教〈佛語〉
〔以上、司會は山田、ヴェルエレン〕

14:45 田中文雄 中國における密教儀禮の展開；施餓鬼の場合〈英語〉

15:15 フランスワ・ピカール François Picard
道教と佛教の音樂；骷髏歌〈英語〉
〔以上、司會は坂出、ロビネ〕

研究案内（現在の研究）〔司會 三浦，遊佐〕

16:00

- 1 イザベル・ロビネ Isabelle Robinet 〈佛語〉
内丹・外丹の定義と概念についての研究
- 2 ブリジット・ベルチェ Brigitte Berthier 〈英語〉
フィールド・ワーク（福建）と文獻の統合
- 3 クリスチーナ・モリエ Christine Mollier 〈英語〉
終末論（地獄信仰）；四川・豊都・平都山（揚子江流

域)について

4 イザベル・アン Isabelle Ang <英語>

呂洞賓研究

5 マリアンヌ・ビュジャール Marianne Bujard <英語>

漢代研究；董仲舒について

6 ローウェル・スカー Lowell Skar <英語>

宋代道教；南宗雷法と内丹研究

李 容周 <日本語>

清微派・神霄派の雷法と『玉樞經』（スカー氏とほぼ同様な研究課題のため共同発表）

中國部會の最後に行われた「研究案内 Séance d'information(Information meeting)」では、研究発表しなかったフランスの研究者各自の現在の研究課題を各々10分程度話し、日本側の質問に答えた。何人かの研究者は、あらかじめレジュメを用意し、参加者に配っていたので、活発な質疑応答がもたれた。日本人研究者にもなじみの深い研究者もいたが、アン、ビュジャール、スカー（現在は日本留學中）、李の各氏のような若い研究者については、日本では知られていなかった。中國部會の日本側参加者は、ほとんどが道教研究と何らかの意味で係わっている研究者であったから、フランスにおける道授研究の中心的人物シペール教授の協力者や、指導を受けているこれらの研究者との情報交換は、非常に有意義であった。また、司會とシペール教授の助言により、各研究者と對應する研究をする日本側参加者は、意見を求められたり、自己の見解との相違を述べたりして、かなり具體的な形での討議がなされた。

中國部會は、既に二回の道教に關する會議をコロックで行った実績をもち、責任者間の密接な連絡もあったために、かなりの成果をあげることが出来た。また使用言語を日・佛二ヶ國語のみに限定しなかったことも成功の理由の一つであろう。實際、渡佛し國際會議に参加しようとする参加者は、ほとんどの人が海外留學の経験者であり、それなりにフランス語の知識を持っていたとしても、全ての人が學術會議でのディスカッションに耐え得るフランス語の語學力を有しているわけではない。コロックの目的は、學術交流であり、そこに語學

の壁を設けてはならない、という主催者の意図が感じられた。これは主會議にても同様であったが、特に中國部會ではその點に注意が拂われていた。進行や諸注意にいたるまで、英語や中國語でもおこなわれ、発表はもとより質問も各自の一番得意とする言語でおこなわれた。日本側がかなり突っ込んだ討議が出来たのは、フランス側が英語・中國語に堪能であるということと、主催者の言語に對するこの親切かつ寛容な態度があったためであろう。

② 主會議

9/23月

- 14:00 参加者受付
- 18:00 歓迎レセプション
- 20:30 開會式 パリ、コレージュ・ド・フランス 8 號室
司會 ルイ・バザン Louis Bazin (パリ第三大學名譽教授)
秋山光和 (東京大學名譽教授)
- 歓迎の辭 イーヴ・ラポルト Yves Laporte (コレージュ・ド・フランス院長)
- 20:45 基調講演 秋山光和 (東京大學名譽教授)
佛教美術の日本的感性への適應の一例；阿彌陀佛の來迎繪圖—スライド付き—

9/24火

- 會場：コレージュ・ド・フランス 5 號室
- 9:00 ジェラルド・フスマン Gérard Fussman (コレージュ・ド・フランス教授)：ガンダーラ地方への佛教の定着
- 9:40 中谷英明 (神戸學院大學教授)：古代佛教詩歌の中にみとめられる地方色
- 10:40 アンヌ・ヴェルガティ夫人 Anne Vergati (CNRS 研究員)：カトマンズ溪谷における佛教とカースト
- 14:00 記念寫眞
- 14:30 モーハン・ヴィジャヤラトヌ Mohan Wijayaratne (CNRS・

第6回日佛コロック「佛教の地方文化への適應」報告(田中)

URA 1424 班):スリランカ佛教徒の葬儀儀禮

- 15:10 ジョルジュ=ジャン・ピノー Georges=Jean Pinault (リル大學第三校専任講師):タクマラカン北部でおこなわれた佛教の諸相;トカラ語文獻による
- 17:00 アジア協會 (Société Asiatique, フランス學士院 L'institut de France 内) 訪問
- 18:00 ジャン・ルクラン Jean Leclant 碑文文藝アカデミー常任幹事 (Secrétaire Perpétuel de l'Académie des Inscriptions et Bells Lettres) 主催レセプション, およびフランス學士院見學

9/25水

- 9:00 今枝由郎 (CNRS 主任研究員): *Bar do thos grol*『死者の書』; チベット化した佛教, 或いは佛教化したチベット
- 9:40 御牧克己 (京都大學助教授): チベットの學說誌
- 10:40 高田時雄 (京都大學助教授): チベット文字で書かれた佛教禪に關する敦煌發見漢文卷物
- 11:20 ポール・マニャン Paul Magnin (CNRS 主任研究員): 敦煌寫本にみえる皇帝・士大夫に捧げた祈願
- 14:00 福井文雅 (早稻田大學教授): 道教文獻における頌の佛教的機能
- 14:40 郭麗英 (フランス極東學院): 業の占いに關する中國の偽經をめぐって
- 15:20 京戸慈光 (コレージュ・ド・フランス 日本學高等研究所研究班員): 中國偽疑經典の研究
- 16:15 ルイ・ガボード Louis Gabaude (フランス極東學院): タイ佛教と現代文化
- 16:55 フランスワ・ビゾー François Bizot (フランス極東學院): カンボジアにおける法身説の發生と傳統の見方
- 17:35 坪井善明 (北海道大學教授): ドイモイ政策という現實政治に直面するヴェトナム佛教
- 18:15 閉會

9/26木

- 9:30 會議録編集に関する會議（発表者の集い）
- 10:40 山折哲雄（國際日本文化研究センター教授）：神道と佛教間の混着
- 11:20 フランスワ・マッセ François Macé（INALCO 教授）：『元元集』；神道の諸説混淆書
- 14:00 ロベール・デュケンヌ Robert Duquenne（フランス極東學院）：佛教の異文化受容の日本での數例
- 14:40 フレデリック・ジラルド Frédéric Girard（フランス極東學院）：善妙；龍女の變身
- 15:20 ハルトムート・ロッテルムント Hartmut Rotermund（高等研究院第五部門教授）：佛性の追求；日本の思想混淆の一例
- 16:15 ベルナル・フランク Bernard Frank（コレージュ・ド・フランス教授）：愛、怒り、色；愛染明王の變容—スライド付き—
- 17:15 コロック會議日程終了
- 18:30 コレージュ・ド・フランス フォンダシオン・ユーゴー Fondation Hugot 主催レセプション

9/27金

- 10:00 「エミル・ギメ蒐集，日本の佛像展 Le panthéon bouddhique au Japon, Collection d'Émile Guimet」（ギメ美術館エデルバック館 Musée Guimet, Hôtel Heidelbach）參觀，フランク教授解説
- 12:00 シャンティイ Chantilly へ出發
- 13:00 シャンティイ城館内レストランにて晝食
- 15:00 フランス學士院所屬のシャンティイ城館とコンデ美術館見學
- 16:30 シャンティイ城館内にてレセプション
- 18:00 パリへ歸着

主會議は，廣い視野に立った，他の専門分野の研究者からも關心を引き得る発表がなされたばかりでなく，発表以外の場所でも，参加者は得難い貴重な經

験をすることができた。たとえば、24日のアジア協會訪問のおりは、王政時代より続く傳統ある協會の活動状態を知ることが出来たし、丁重にもてなされたレセプションは勿論のこと、普通では入ることが出来ないフランス學士院議場の内部まで見學できた。また、會議日程終了後のフォンダシオン・ユーゴーでのレセプションは、一流の店から酒肴が運ばれ、公式の挨拶は一切なく、夫人同伴のフランスの研究者と自由な會話を楽しむことが出来た。この會場は第4回コロックの會議が行われた所で、6年前を懐かしく思い起こした。

更に、最終日のギメ美術館とジャンティイへの小旅行も、忘れられない経験であった。日本學の第一人者フランク教授の解説のもと、ギメの蒐集した日本の佛像・佛畫がいかに體系的に集められたかを理解できた。また、ジャンティイはパリから1時間ほどの郊外にあり、フランス學士院に所屬する城館があり、内部は文獻や宗教畫のミニチュアール等を所藏する美術館にもなっている。秋晴れの日を、郊外の素晴らしい景色の中で過ごせて、コロックの最後を飾る記念すべきエクスカーションとなった。この頃になると、會議の疲れと緊張から體調を崩す者もあらわれたが、最後まで有意義な學術交流の時間を持ち、翌日以降各自の計畫に合わせて、歸國の途や次の目的地へと旅立った。

3 その他の報告事項

今回のコロック参加者はオブザーバーも含めて、日佛東洋學會の『日佛東洋學會通信』を通じての公募により渡佛した。會員であれば誰でも参加でき、特に資格などというものも設けられた譯ではない。費用も自辨が原則であったが、発表者はフランス側から會期中のホテルの費用と滞在費の補助が支給された。會期中用意されたホテルは、數ヶ所に分散されていたが、いずれもカルチュ・ラタン中心部にあり、會場から歩いて10分程度の所で非常に便利であった。

ただ、出發直前に2名の方が発表を豫定されていたながら、発表題目が主會議にふさわしくないので、別の會場を用意するとフランス側の意向にたいして、渡佛を辭退されたことは残念なことであった。個人的な見解ではあるが、フランス側ももう少し柔軟な對處が必要ではなかったろうか。

発表者以外の参加者は、石澤良昭（上智大教授）、加藤榮一（東大資料編纂

所教授)氏をはじめ、オブザーバーとして宮澤正順(大正大助教授)、砂山稔(岩手大助教授)、遊佐昇(明海大専任講師)、成瀬良徳(大正大講師)、森由利亞(早大院)、山田均(學振研究員)、鹿島有希子(東洋大院)の各氏であった。この中で、遊佐氏は中國部會での司會を、石澤、加藤の兩教授と成瀬氏は主會議での司會を勤めた。主會議の司會者は、主會議發表者以外の者でフランス語か英語で司會が出来る者をフランス側が指名した。そのため上述の3名と中國部會發表者の山田氏と田中とが、主會議の日本側からの司會者となった。

また、シペール教授の好意により、中國部會の希望者は會期中に國立圖書館 *Bibliothèque Nationale* に所藏されている敦煌文書を閲覽することが出来た。ほとんどの人が、敦煌文書を實際に見るのははじめてであり、特に佛教・道教の文書を選んで閲覽させてくれたので、誠に興味深く見學した。敦煌文書による研究を手がけている研究者は、熱心にメモをとり歸國後各種資料との校勘をしたいと語っていた。

フランス東洋學だけに肩入れするつもりはないが、パリはやはりヨーロッパ東洋學界の窓口であり、情報發信基地である。廣い意味での中國宗教研究にとって、今後の日佛の學術交流は不可欠であるし、多くの人々の努力によって築かれた道教研究の協力關係は續けられねばならないだろう。しかし、今回のコロックの成功は、かなり個人的な學的人脈に負うところが多かったのではなかろうか。これをどう受け継ぐかは、後進の者にとっては難しい問題である。

この會議の會議録は、26日の「會議録編集に關する會議」で福井、フェスマン兩教授を編集責任者として、極東學院の出版物の一冊として出版することが決まった。また、本報告以外にも、福井教授が『東方學報』に、山田氏が『東方宗教』に報告される豫定であるので、それも参考にされたい。

また、會議中にコーヒーのサービスにあたられたシペール夫人や、學會の裏方を勤められた松崎夫人をはじめとするフランス側の事務局の方々に、紙面を借りて謝意を表したい。